

## 東南アジア史学会会報 No.3

昭和 42 年 6 月 5 日

### 研究会

「19世紀における東南アジア社会の変質」という共同課題で各国別発表を次の日程で行った。

4月28日(金) インドネシア 岸 幸一

5月12日(金) 帰国報告 永 積 昭

5月26日(金) タイ 市川 健二郎

以下予定

6月 9日(金) フィリピン 池 端 雪 浦

6月23日(金) ベトナム 山 本 達 郎

同 日 カンボジア 高 橋 保

( 3時30分～5時30分, 於東大図書館演習室E-2 )

### 夏季研究大会

来る7月16日(日), 17日(月)の両日午前10時～午后5時東京四谷の上智大学で開催の予定。第1日はシンポジウム：19世紀におけるインドネシア史の問題点, 発表予定者：岸幸一, 田中則雄, 永積昭, 森弘之。終了後引き続き同所で懇親会。第2日は自由課題研究発表と一般討論。詳細は別紙でおしらせします。またその折, 大会への出欠を伺います。なお自由課題研究発表者は本会報掲載のための発表要旨2000字以内, 横書きを発表当日編集係へお出し下さい。

### 委員会

第3回委員会を4月17日東京大学東洋史研究室でおこなった。議題：1. 春季研究会の件, 2. 夏季大会の件, 3. 研究成果刊行の件。

### 懇 談 会

訪日のLemoine 夫妻を囲み 2月 11 日本郷で夕食を共にしラオス調査談を聞いた。出席者：白鳥，小堀，大林，高橋（保），市川。

帰国された永積氏を囲み 5月 12 日本郷で夕食を共にし欧米の研究事情をうかがった。出席者：山本，太田，白鳥，池端，土屋，市川。

### 研究会講演要旨（5月 12 日）

#### 帰 国 報 告 永 積 昭

1961年9月から67年4月中旬まで、5年半の留学生活中、アメリカのニューヨーク州 Ithaca 市にある Cornell 大学大学院に籍をおき、インドネシア近代史を専攻した。同大学のアジア研究学部 (Department of Asian Studies) にある Southeast Asia Program (以下 SEAP と略す) は、1950 年発足以来、Yale 大学と並んで最近までアメリカに於ける東南アジア研究の二大センターをなして来た。政治学の George McT. Kahin, 文化人類学の Lauriston Sharp, 経済学の Frank H. Golay, 言語学、文学の John M. Echols, 歴史学の O.W. Wolters など、各分野の優秀な学者を教授陣に持ち、大学院学生は現在 58 人程である。地域について云えば、教授、学生ともインドネシア専攻の者が最も多く、タイがこれに次ぎ、他の諸国は比較的少い。また学科について見ると、政治学及び文化人類学の専攻学生が多く、歴史を専攻する者は 10 人に満たない点が日本と異っている。総じて現状分析を得意とするが、歴史研究には興味が薄く、これがアメリカの学問の長所とも短所ともなっている様に思われる。

SEAP の大学院学生は東南アジア諸言語のうち少くとも一つを学ぶ義務があり、現在ビルマ、セブ及びビサヤ、インドネシア、ジャワ、タガログ、タイ、ヴェトナムの諸語及びオランダ語の講座がある。どの講座もその言語

### 懇 談 会

訪日のLemoine 夫妻を囲み 2月 11 日本郷で夕食を共にしラオス調査談を聞いた。出席者：白鳥，小堀，大林，高橋（保），市川。

帰国された永積氏を囲み 5月 12 日本郷で夕食を共にし欧米の研究事情をうかがった。出席者：山本，太田，白鳥，池端，土屋，市川。

### 研究会講演要旨（5月 12 日）

#### 帰 国 報 告 永 積 昭

1961年9月から67年4月中旬まで、5年半の留学生活中、アメリカのニューヨーク州 Ithaca 市にある Cornell 大学大学院に籍をおき、インドネシア近代史を専攻した。同大学のアジア研究学部 (Department of Asian Studies) にある Southeast Asia Program (以下 SEAP と略す) は、1950 年発足以来、Yale 大学と並んで最近までアメリカに於ける東南アジア研究の二大センターをなして来た。政治学の George McT. Kahin, 文化人類学の Lauriston Sharp, 経済学の Frank H. Golay, 言語学、文学の John M. Echols, 歴史学の O.W. Wolters など、各分野の優秀な学者を教授陣に持ち、大学院学生は現在 58 人程である。地域について云えば、教授、学生ともインドネシア専攻の者が最も多く、タイがこれに次ぎ、他の諸国は比較的少い。また学科について見ると、政治学及び文化人類学の専攻学生が多く、歴史を専攻する者は 10 人に満たない点が日本と異っている。総じて現状分析を得意とするが、歴史研究には興味が薄く、これがアメリカの学問の長所とも短所ともなっている様に思われる。

SEAP の大学院学生は東南アジア諸言語のうち少くとも一つを学ぶ義務があり、現在ビルマ、セブ及びビサヤ、インドネシア、ジャワ、タガログ、タイ、ヴェトナムの諸語及びオランダ語の講座がある。どの講座もその言語

を母国語とする講師と、アメリカ人の専門語学者との2人で講義し、1年目は週8時間、各学期10週で会話を主とする。2年目からは訳読や作文を主とし、時間数も半分に減る。なおこれらの語学を主とする10週間の夏期講座が1年交代でCornellとYaleで開かれ、67年夏の当番校はYaleである。

学生は主専門学科(Major Subject)の他に、2つの副専門学科(Minor Subject)を選択せねばならない点が日本の制度と異なる。その3学科について1人ずつ、計3人の指導教官が取得課目についての相談に応ずるので、取得課目は人によって差がある。博士課程の場合、論文を書き始めるまでに、少くとも夏期を除く6学期間(3学年)在学せねばならず、その間2度の口述及び筆記試験に合格せねばならない。

講義について日本と違う第一の点は、歴史について云えば、概説と演習はあるが、特殊講義に相当するものがないことである。概説は常に午前の1時間ずつ週3回の講義で、秋学期がヨーロッパ人来航以前の東南アジア史、春学期がそれ以後と云う風にきまっている。休講が殆どなく、時間厳守なので、大体予定通り進む。学期中はアサインメントの読書のほか、2~3のレポートを書かされ、期末に試験があるので相当忙しい。教授は常に学界の成果を取り入れ、概説の内容を新しくしているが、所詮概説は概説であり、学生が教授自身の最も専門とする問題について詳しく聞く機会は意外に少い。結局イギリスの大学で行なわれている様なTutorial Systemを学生の側から願い出て、週1回または隔週に、所定の本を読んで行き、それについて教授と討論すると云う形式以外に、その可能性はない。私自身屢々これを志願し、とくに63年夏Yale大学に於て、Harry J. Benda教授から多くを学んだ。

演習は常に午後か夜で、週1回2時間ずつ行なわれる。学生の研究発表を主として交代で発表を行ない、それについての討論の結果を取りいれて期末にレポートを提出するのが最も普通の形式である。討論の際発言しないどんどん減点される。この他、毎週ゲストを迎えて各自の専門領域について語らせ、討論する形式のものもあり、SEAPで毎学期東南アジア各地域を順番に論ずる地域演習(area Seminar)はこの形式によることが多い。日本

の場合の様に、一つのテキストを輪読する形式のセミナーはあまり行なわれていないうが、これは東南アジア史の根本史料を読む場合、学生の語学の素養に差があるため事実上不可能らしく、皆で漢籍等を読み得る日本の例は寧ろ恵まれていると云えるであろう。

3年間の単位取得の後、64年夏から66年夏にかけてオランダに滞在し、学位論文作成の史料蒐集のため、主としてハーグのオランダ内務省所蔵の旧植民省文書、国立文書館所蔵の個人文書、王立言語地理民族学会 (Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde) の個人コレクション、及びアムステルダムの王立熱帯研究所 (Koninklijk Instituut voor de Tropen) の文書等を調査した。ライデン大学はインドネシアの語学、文学に、(Th. Pigeaud, C.C. Berg) アムステルダム大学は社会学に、(W.F. Wertheim) またユトレヒト大学は歴史学に (W.Ph. Coolhaas) それぞれ伝統を誇るが、アメリカの東南アジア研究者の激増ぶりに比して、オランダに於ける研究者には若い世代が甚だ少く、図書館等でも最近の定期刊行物の類をあまり揃えていないのが目についた。

66年6月オランダから再びアメリカに渡り、Ithaca に8ヶ月程滞在してインドネシア最初の民族運動である Budi Utomo についての学位論文を完成し、最終口述試験に合格後、今年2月末 Ithaca を出発して東南アジアに赴き、インドネシアに約3週間滞在して、ジャカルタの国立博物館附属図書館で、論文主題に關係ある定期刊行物を多数見ることが出来た。またジョクジャカルタでは、Borobudur などの古代ジャワ遺蹟及び Budi Utomo 関係史蹟を踏査した。9, 30 クーデター以後低迷していた政治不安は漸く去ったが、インドネシアの経済危機はまだ続いて居り、現在インドネシアの学者にとって研究生活は極度に困難と思われる。将来この国の学術が一日も早く興隆に向うことを念じつゝ、4月15日に日本に帰り着いた。

海外研究情報 II. 市川記

第19回 Association for Asian Studies は 1967年3月20—22日シカゴで開かれた。東南アジア関係は次のとおり：「東南アジアの軍事政治関係」司会者 J. Silverstein, 発表者, ベトナム P. Devillers, フィリピン C. Lande, インドネシア F. P. Bunnell, 討論者 M. Janowitz, 「東南アジアの経済力と社会変化」司会者 G. Ness, 発表者, タイ S. Piker, フィリピン J. Anderson, マライシア華僑 J. D. Clarkson. 「アメリカのフィリピン研究」司会者 C. O. Houston, 発表者, 学史 F. Eggan, 歴史 T. Friend, 地理 F. Wernstedt, 政治 D. Wurfel, 社会 W. Sibley, 情報資料 D. V. Harl, 総括 C. O. Houston. 「東南アジアの政治意識」司会者 J. Badgley, 発表者, インドネシア D. Lev, ベトナム D. Wurfel, マライシア J. Scott, 討論者 L. W. Pye, S. Simon. 「政治における衝突」司会者 R. O. Tilman, 発表者, マライシア J. Grossholtz, フィリピン M. Meadows, インドネシア R. Pagett, 國際関係 B. K. Gordon, 討論者 H. J. Benda, R. Butwell, R. S. Milne. 「教育と政治の発展」司会者 W. Griffin, 発表者, 概論 J. Fisher, ビルマ J. Silverstein, ベトナム Huynh Kaim Khanh, フィリピンと韓国の比較 C. I. E. Kim and C. L. Hunt, 討論者 J. Dibona, D. Pfanner.

第2回比米関係アメリカ会議は 1966年11月17—19日ミシガン大で開かれた。米援助のフィリピン社会へ与える影響について G. Ness, B. Higgins 等が討議し, Laurel-Langley 協定改訂にそなえこの会議の報告書を R. Fifield, D. Wurfel 等が起草。

前号で記したアジア歴史家国際会議は 1968年8月5—10日 クワラルンプールで開かれる。予定される東南アジア関係シンポジウムは「現住民社会政治組織」リーダー D. Wyatt, 「19世紀の諸国」リーダー A. J. S. Reid, 「日本軍政」リーダー H. J. Benda, 「近代社会史」リーダー W. R. Roff. 申込み先は前号参照。

第8回国際人類学民族学会議は 1968年9月3—10日東京と京都で開

かれる。21のシンポジウムの中のNo.12は「東南アジア社会文化変化の原動力」リーダーK. G. Izikowitzの予定。出席申込みは本年10月1日までに日本学術会議内、同組織委員会へ。

アリゾナ大で現在 Southeast Asia : A Critical Bibliography を編集中。重点的に選択、評価し内容解説を付ける。

スタンフォード大フーヴァー研究所のマイクロフィリム近刊案内中に戦中の華僑秘密結社関係、大東亜戦争言論集などがある。Microcard Editions, Inc., 901 Twenty-sixth St. N. W., Washington, D. C. のカタログに JRAS と JA の他に Journal of the Asiatic Society of Bengal のバックナンバーが加わった。

サラワク博物館館長を引退した Tom Harrisson 氏は在英中だが、本年秋からコーネル大で講義をおこなう。

前号で紹介した雑誌 Indonesia の申込み先は Cornell Modern Indonesia Project, 102 West Avenue, Ithaca, N. Y. 年会費 \$ 5, 一冊購入 \$ 3.

#### 主要新刊書・論文

\* Nghiem Dang, Viet-nam: Politics and Public Administration. East-west Center Press, Hawaii. 1966, 448 p. \$10.

\* Fall, Bernard B., Vietnam Witness 1953-1966. Frederick A. Prager, N. Y. 1966, 363 p. \$6. 95.

\* Muscat, Robert J., Development Strategy in Thailand: A Study of Economic Growth. Frederick A. Prager, N. Y. 1966, 310 p. \$15.

\* Narin, Ronald C., International Aid to Thailand, Yale Univ. Press. New Haven, Conn. \$. 6. 50.

\* Trager, Helen G., Burma Through Alien Eyes: Missionary

- \* Views of the Burmese in the 19th Century. Frederick A. Prager, N. Y. 1966, 239 p. \$6.50.
- \* Clutterbuck, The Long, Long War, Counterinsurgency in Malaya and Vietnam. Frederick A. Prager, N. Y. 1966, 206 p. \$5.95.
- \* Tregonning, K. G., The British in Malaya: The First Forty Years 1786-1926. The Univ. of Arizona Press. 1965, 186 p.
- \* Miller, Harry, A Short History of Malaysia. Frederick A. Preger, N. Y. 1966, 274 p. \$.6.
- \* Hickey, Gerald C., Village in Vietnam. Yale Univ. Press, New Haven, Conn. 1966. \$2.95.
- \* Hindley, Donald, "Political Power and the October 1965 Coup in Indonesia," The Journal of Asian Studies, 26, 2 (Feb. 1967), 237-250.
- \* Reid, Anthony, "Nineteenth Century Pan-Islam in Indonesia and Malaysia," The Journal of Asian Studies, 26, 2 (Feb. 1967), 267-283.
- \* Wolters, O.W., Early Indonesian Commerce: A Study of the Origin of Srivijaya. Cornell Univ. Press, Ithaca, N. Y. 1967, 336 p. \$8.75.
- \* Golay, Frank, ed., The United States and the Philippines. Englewood Cliffs, New Jersey. 1966, 179 p. \$3.95.

東京大学東洋史（南方史）研究室所蔵雑誌から

Indonesië. 's-Gravenhage, N. V. Uitgeverij W. Van Hoeve,  
Vol. 1 --- Vol. 9 (1947 --- 1956)

La Revue Indochinoise: Juridique & Économique. Hanoi,  
Imprimerie d'Extrême-Orient, 5 Vols. (1938-1939)

Bulletin des Amis du Laos. Hanoi, Amis du Laos, 4 Vols.  
(1937-1940)

Instituut voor de Taal-, Land- en Volkendunde van  
Nederlandsch-Indie. Adatrechtbundels. 45 vols.

Mensch En Maatschappij: Tweemaandelijksch Tijdschrift.  
Vol. 1 --- Vol. 24. (1925 --- 1949)

Department of History, University of Malaya. Journal  
Southeast Asian History. Singapore, Vol. 1-1 --- Vol. 3-2.  
(Mar. 1960 --- Sept. 1962)

Bulletin de la Société des Études Indochinoises. Nouvelle  
Série. Saigon. Tome 31 --- 36. (1956 --- 1961)

B. E. F. E. O. Tome 11 --- 52-1

Quarternary Journal of the Mythic Society. Vol. 1 --- 4, 11 --- 28,  
30 --- 54.

Philippine Social Sciences and Humanities Review. Vol.  
13 --- 15, 17 --- 27.

---

<会員募集> 入会は葉書又は電話で、東京大学文学部東洋史（南方史）  
研究室気付東南アジア史学会へお申し込み下さい。会費は年  
額千円。（振替口座 東京 59,721）

---